



十和田市立中央病院

病院ニュース

# さわらび

平成 29 年 2 月 16 日号



## 青森県内の排泄ケアの先駆け！

### 十和田地区コンチネンスケアセミナー開催

褥瘡対策委員会 褥瘡管理者 木村 英子

青森県内で、はじめて十和田地区のコンチネンスケアセミナーが 2016 年 12 月 17 日（土）13：30～16：30、十和田市立中央病院さわらび会館で行われました。

コンチネンスケアセミナーは、地域包括ケアシステムの中で排泄ケアの連携を普及することを目的として開催され、主に三八・上十三地域の看護・介護・福祉事業所など 18 施設からヘルパー、介護士、看護師、作業療法士、施設所長や青森県看護協会の方々など多職種で 57 名の参加がありました。

はじめに、排泄ケアサポートセンターウエルビーイングオフィスK代表の梶原敦子氏より「生き方を支え、尊厳を護る排泄ケアを再考する～排泄ケアになぜ地域連携が必要なのか～」と題して基調講演が行われました。2025 年に向けて、地域包括ケアシステムの構築が進められている中で、排泄の問題はなかなか本人が訴えることができなく、また排泄ケアは家族にとって介護負担が大きい問題です。それらを解決するためには、病院・施設・自宅においても排泄や排泄障害に対する知識・技術・態度を学び、尊厳を護り自立を促す排泄ケアを提供できるようにならなければならないということでした。また、2016 年 4 月に急性期医療機関において、排尿自立指導料の算定が医療保険で認められたことにより、今後地域においても排泄ケアに関する何らかの算定が認められる可能性があり、排泄ケアの考え方、手法を変えていかなければならないとのことでした。

次いで、当院の認定看護管理者である築場理利子看護局長より、「超高齢化社会における看護のあるべき姿をめざして～理想ケアの実現を目指した院内ケアの取り組み」について講演がありました。内容は、地域の参加者の方々に当院の様子や地域中核病院としての地域とのふれあいの中での支援体制、活動状況について紹介がありました。そして、高齢化に伴う看護業務や看護師不足に伴う応援体制の中で、最も多かった排泄ケアの業務改善に取り組んだ経緯について説明がありました。看護師の業務負担軽減を目的に考えていった排泄ケアでしたが、そこには自身の親の介護体験も含め尊厳の大切さを感じたということでした。「自分が患者になった時、高齢者になった時の受けたいケア・看護師という専門性を活かしたケアの提供をしなければならない。」という意志に基づき取り組んだ排泄ケアであったとのことでした。まだまだ途中ではあるが、高齢者の尊厳の保持とQOLを高めるような個別性のある排泄ケアの実践強化と退院後も排泄ケアが継続してできるよう地域を巻き込んだ排泄ケアの推進をしていくという事でした。

「排泄は、人間の基本的ニーズであり、排泄ケアの目的は身体の機能低下や社会生活を制限する排泄障害に対して苦痛を取り除き、尊厳を保ち生きる意欲や人間らしさを取り戻すこと」といわれています。また「繊細な心遣いと熟練した技術を何よりも求められるのは排泄ケアである。」ともいわれています。セミナー参加にあたり、排泄ケアに対する日本社会での取り組みや方向性がわかり、当院における排泄ケアに対する看護の原点を振り返るきっかけとなりました。そして、これからの社会情勢と看護の理想を融合させた排泄ケアの実践を目指すためには常日頃から信念を持って取り組んでいかなければならないと思い、そのための施策を講じていきたいと思いました。



# 「災害発生時院内初動対応実践研修会」に参加して

災害ワーキング 中野渡 綾子

平成 29 年 2 月 10 日朝から濡れ雪の降るなか、午後 3 時から岩手医科大学病院救急・災害・総合医学講座総合医学分野教授 眞瀬智彦先生、助教 藤原弘之先生、災害時地域支援教育センター 奥野史博先生より別館講堂にて災害概論と災害対策本部運営演習についてご教授・ご指導いただきました。



岩手医科大学病院  
救急・災害・総合医学講座  
総合医学分野教授 眞瀬智彦先生

講義の中では D M A T として活動をしてきた岩手宮城内陸地震での活動での安全管理・通信手段がなかったために災害のど真ん中にいながらも D M A T が「孤立」してしまったという経験、そこから災害医療の取り組みが行われていったことなどが話されました。

東日本大震災での活動からは、課題として・外傷診療に加え、慢性疾患への対応も必要となったこと・通信の途絶のため情報収集が困難であったこと・本部機能、特に本部を支えるロジスチック機能が脆弱であったこと・長期にわたる本部調整が必要であり、また、災害医療人の育成が必要であることなどが話されました。また救急（外傷）医療中心から総合医療への移行・本部機能の強化・医療を支える人材（ロジスチック）の育成などの必要性が指摘されました。

後半の災害対策本部運営演習では、今までに感じたことのない地震が発生したとの想定のもと、本部を立ち上げて活動を行う訓練を行いました。本部の場所は確保することが出来、初動時の本部人員はいたのですが、役割分担がわからず次々に来る情報をどうしたらいいのかわからない状況となりました。初めての演習で、感じたことや気づいたことを災害マニュアルの見直しや実動訓練に活かし、災害拠点病院として地域と連携して勉強会や活動が出来るようにしていきたいと思えます。研修に参加していただいた皆様お疲れさまでした。



岩手医科大学病院  
救急・災害・総合医学講座  
総合医学分野助教 藤原弘之先生



災害時地域支援教育センター  
奥野史博先生

（左・中・右）本番さながらの緊迫した演習



## ご寄附をいただきました。

2 月 6 日（月）『十和田市援会（会長：欠畑茂治様）』様より「ワンハンド電子血圧計（簡易血圧測定器）」3 台のご寄附を頂きました。病棟等で使うため早速活用させていただきます。

十和田市援会としてご協力いただいている市内スーパー、ガソリンスタンド、飲食店、パチンコ店等の皆様も含め、職員一同ご厚意に深く感謝申し上げます。



写真左から：田中副会長、欠畑会長、松野管理者、接待事務局長



1 階エントランスホールに  
展示中の「おひなさま」

